

---

# ある平和な地球防衛軍

あいにゃん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ある平和な地球防衛軍

### 【Zコード】

Z4942D

### 【作者名】

あいにゃん

### 【あらすじ】

ある地球防衛軍の平和すぎる毎日。名前や部隊など音楽やつてる人には馴染みが深いと思いますが音楽とは切り離して読んでください。完全にフィクションで名前を借りただけなので・・・。

## 秘密兵器

「ヴォルフガング大佐の  
今日のご飯はハンバーグ。

BGMはピアノ、クラリネットとヴィオラのための三重奏曲 変ホ  
長調 K・498 (W.A.Mozart)

「平和ですね、大佐」

ピートル少佐は言いました。

「肉は世界を救うのだよ、ピートル少佐。」

「そうですね、大佐」

「ところでピートル少佐。ぐるみ割り部隊が活躍しているそうではないか!」

「いえいえ、大佐の40番戦隊の方が活躍してるじゃないですか!」

「まああの部隊には秘密兵器“MATEKI”があるからねえ」

「そりなんですか!秘密兵器つて・・・?」

「将軍には内緒にしちゃんだぞ!」

「イヒッサー!」

ピートル少佐、今日のおやつはチョコバナナパフェです。

BGMは交響曲5番1楽章(“Beethoven”)

「ところでルートヴィッヒ軍曹、“MATEKI”って知ってるかね?

「ああ、モーツアルトのオペラですね!」

「違う違う、40番戦隊の秘密兵器だよ」

「ああ、聞く人皆幸せにする楽器ですね!」

「楽器なのか!?」

「そうですよ。40番戦隊のアントニン中尉が詳しいはずです

「やうなのが!アントニン中尉を呼びたまえ!」

アントーン中尉ピヨートル少佐に呼び出される。

BGMはスラブ行進曲（P·I·Tch a i k o v s k y）

「お呼びですか？少佐」

「“MATEKI”について教えてくれ！」

「オラ、大佐に口止めされてるだす。」

「そこをなんとか・・・」

「無理だす・・・大佐に許可を取つていただかないと・・・」

「まあまあコレでも・・・」

ピヨートル少佐は銘菓「新世界」を渡す。

お菓子の下には大量のコーヒーが・・・

「お・・・お主も悪だす・・・」

「けつけつけ」

「大佐には秘密だすよ。実はオラもよく知つてません

「何だつて！？！」

「ヨハネス少尉に譲つていただいたものだす」

「ヨハネス少尉！？どこにいる？」

「ぐるみ割り部隊だす・・・」

「え・・・」

ピヨートル少佐、ヨハネス少尉を呼び出す。

BGMは交響曲第1番4楽章（J·B·rahms）

「お呼びでしょーか、少佐」

「“MATEKI”とはなんだ？」

「へえ、モーツアルトのオペラでござります」

「秘密兵器だ！」

「ああ、白鳥部隊も使つてますよ。うちも先日導入したじゃないですか！」

「へ？」

「え？」

「ほら、先日少佐が発注してたじやないですか！」

「え？」

「ヨハン工房の最新兵器でタイタンと一緒に発注したではないですか！」

そーいえばそーだつた気がしたピヨートル少佐。

そんなことも知らない上官を持った可愛そうな部下たち。

そんな部隊から発注を受けたヨハン工房のセバスチャン。

今日のランチはグスタフ将軍とカルボナーラ。

BGMはマタイ受難曲（J.S.Bach）

「最近お宅からタイタンとMATEKIの発注受けましたよ」

「なんだつて！」

「使用許可されたんですか？」

「いあいあ、そんなことしてへんで！」

「あらー『めんなさいね。売っちゃつた・・・』

「タ・・・タイタンは私のお気に入り千人部隊専用の武器なのに・・・  
・悲劇的だ！」

怒ってしまったグスタフ将軍。

至急ピヨートル少佐とヴォルフガング大佐を呼びました。

BGMは交響曲第1番4楽章（G.Mahler）

「君たちは最近活躍しているそうだね！」

「いえいえそんな・・・」

「無許可でタイタンとMATEKIを使ってるからか？」

ピヨートル少佐はビックリしましたがヴォルフガング大佐は静かに  
言いました。

「無許可だなんて・・・先日将軍が通達を出したじゃないですか！」

「そんなもん・・・あつ！」

BGMは交響曲第9番4楽章（A.L.Dvorak）

先日巨大で凶暴なサメ捕獲作戦にタイタンとMATEKIの使用許

可を出したのを

すっかり忘れていたグスタフ将軍。

お詫びに2人に銘菓ヴィシェフラドを渡したとぞ。

## 魔王

ある屋下がり、ヴォルフガング大佐は窓からクラリネット嬢を眺めていました。

「うーーーん、彼女はカワユイなあ」

ぼーーっとしていたらアントーン中尉が慌ててやってきました。

「大佐！大佐！将軍様より通達だす！」

「何だつて！？こんな平和なときによ……」

「そ……それが急ぎだすで……」

ヴォルフガング大佐は通達を目にした瞬間顔色を変えました。

「少佐を呼んでくれ！ピヨートル少佐だ！早く！」

「は……はい！！！」

そんな時ピヨートル少佐は一人部屋に引きこもりマイインスイーパーをしていました。

もちろん、チョコバナナパフェを食べながら……。

「コンコンコンコン」

「誰だよ！？」

「アントーンだす！大佐がお呼びだす！」

「大佐……またボクをいじめるのかなあ？」

「そんなことないだすよ！至急だす！急いでください！」

ピヨートル少佐は食べかけのチョコバナナパフェを流し込み部屋を出ました。

「大佐、お呼びでしょうか」

「ああ、少佐。先ほどグスタフ将軍から通達があつたのだ」

「……どのような？」

「魔王ベドルジハがヴィシエフラド城にいるらしい。至急捕獲せよ」

「魔王ベドルジハ……一体どのような方で……？」

「俺もよく知らないがブランーク付近で田撃されたのを最後に誰も見ていない」

「捕獲せよとのことなので、きっと邪悪な奴に違いないですね！」

「そうだな……ところで少佐」

「……出動ですか？」

「もし手柄を取つたならグスタフ将軍に君の昇進を持ちかけてみよう！」

「え！……いんですか！？ボク頑張ります！」

そうしてピヨートル少佐は白鳥部隊を引き連れてヴィシエフラト城へと向かいました。

ちなみにぐるみ割り部隊は現在サメ捕獲作戦に苦戦しています。

ヴィシエフラト城は狭いので中に入るのはピヨートル少佐の2人になりました。

「なあルートヴィッヒ軍曹、魔王ベドルジハを見たことがあるか？」

「はあ、一度だけ……」

「何！？何処でだ！」

「バルタヴァショッピングセンターで幼い頃迷子になつたときに助けていただきました」

「は！？」

「へえ、拙者、魔王は実は心優しいのかと……」

「しかしだな、今回は將軍の通達だ」

「何かの間違いではないかと、心底不安なんです……」

そんな会話をしていたとき隣にいかにも「デーモン」な格好をした人が現れました。

「あー魔王！」

「嘘だあー！」

「ふはははは！私が魔王ベドルジハだ！」

「くつ・・・お前が魔王ベドルジハだな！」

少佐はとつたに眠れる森の薬をました。  
ルートヴィッヒ軍曹が眠ってしまった！！！

「ふはははは！仲間を寝かせてどーする気だー？ああん？」

「くそ・・・軍曹・・・」

先日の秘密兵器勘違い事件（秘密兵器参照）を恐れ  
タイタンもMATEKIも持つてきていない少佐。  
どうする？

「仕方がない・・・これでも食らえ！！！」

1812発のビンタを魔王に向かつて打ち続ける少佐。  
少佐の手もぱんぱんに腫れあがつてくる・・・。

「だ・・・ダメです・・・悪い人ではないんです。」

軍曹の寝言です。

しかし気付いたときには魔王の顔はぱんぱんで意識を失つてました。  
・・・。

捕獲、一応成功みたいです。

「これでボクも大佐になれるかな？えへへ！」

ピョートル少佐は捕獲した魔王を連れ、グスタフ将軍の元へと向かいました。

「グスタフ将軍。魔王ベドルジハを捕獲しました！」

「よくやつてくれた！ピョートル少佐。さあ、彼を……つて……」

「

顔がぱんぱんに腫れた魔王を見てグスタフ将軍は驚きました。

「ちょ・・・なんでこんなことなってんねん！」

「へえ、少々抵抗されたもんで……」

「え？ 何で？ 抵抗？」

魔王は言いました。

「だつてこいつらウチに勝手に上がりこむんだもん……」

少佐は反撃します。

「勝手もなにも！ 口抛していたのはお前だらう！」

将軍は言います。

「人の家にはピンポン押して入ろうよ……」

人の家？

「ヴィシエフラド城の家賃、老朽化につき値下げするよって伝えたくて、ここに連れてきてほしかっただけなんやけど……」

なんだつて！？

少佐は驚きのあまり外れそうなアハを呟ながら言いました。

「え・・・じゃあ、あの通達は……」

「ああやつて書いたら面白こじやん！」

とことん迷惑なグスタフ将軍。  
いわゆる平和ボケってやつでしょーか？

お詫びにてヴィショフラード城の家賃を一年間無料にしたとぞ。

「結局ボクは少佐のまま！？」  
頑張れ、ピートル少佐。

## 夢見心地事件1

ピヨートル少佐、今日は一人でヨハン工房にお買い物。

「うーん、そろそろマンゴーオレンジパフェの季節だなあ・・・」  
そんな時ピヨートル少佐は棚の隅に置かれた埃をかぶった瓶を見かけました。

そつとその瓶を手に取ります。

夢をのぞこう！！！

とろんぼーーーん

この薬は友達と半分こじて飲むとお互いの夢がのぞけるよー。

### ご注意

友情が壊れる恐れがあるのでご使用の際には十分にお気をつけください。

と書いてありました。

これを読んだピヨートル少佐はニヤリと笑みを浮かベレジに持つて行きました。

「いらっしゃああい。あ、アンタ。コレ買っちゃうの？」  
レジにいたセバスチャンはピヨートル少佐に言いました。

「ボクが何を買つたっていいでしょ！」

「んま。まあいいんですけど・・・」「

せつしてニヤリと笑みを浮かべたままピアーテル少佐は帰つていきました。

真つ暗な血室でピアーテル少佐は考えます。

ヴォルフガング大佐の夢ものぞいてみたいな・・・  
もつと見てみたいのは將軍のだ。

しかし上官の夢をのぞくのはちょっと氣が引けるな・・・  
ルートヴィッヒ軍曹のは・・・しかし彼は優秀な部下だ。  
ではアントーン中尉・・・彼はどうに出身なのか非常に気になる。  
きっとヤシの過去は夢に隠されてくるはずだ!  
よしーアントーン中尉にしよう!――!

そうしてピアーテル少佐はアントーン中尉を呼び出しました。

「お呼びですか、少佐」

「はははは、キミとお菓子パーティーがしたくてだな」

「それならルートヴィッヒ軍曹としてくださいだす。オラ忙しいだ  
す。」

「そ・・・そ・うか・・・」

「では失礼するだす」

「ちょ・・・ちょつと待つてくれ!」

「何ですか?」

「せつかく来てくれたんだ。この特性ジュースだけでも飲んでくれ  
!」

「なんか紫色だすよ・・・?」

「高級グレープを取り寄せて作らせた逸品だ。是非キミに飲んでも  
らいたい」

「マンゴーの匂いがするだすよ?」

「高級グレープとはそのようなものなのだ。パッションだ!」

「はあ。ではいただきます」

そうしてアントニン中尉は薬の入った液体を口にしました。

「おえ! チョコバナナ味じゃないだすか! ! !」

「パッションとはそういうものだ」

「情熱間違い過ぎだす!」

そう叫びながら全部飲み干したアントニン中尉は部屋を後にしました。

た。

「ふふふ、これで夜が楽しみだな

ピヨートル少佐も同じような液体を飲みました。

「おえ! カレー味だ! ! !」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4942d/>

ある平和な地球防衛軍

2010年12月31日03時43分発行